



英靈にこたえる会
102-0073 東京都千代田区
九段北 3-1-1
靖国神社遊就館内
電話・FAX
03-3261-7415
郵便振替 00120-7-160184

月刊誌「致知」の「巻頭の言葉」転載

日本はこれでいいのか (IV)

— 今こそ気概をもって立ち上がれ —

英靈にこたえる会中央本部 会長

昭和の遺言状

自らの国は自らの守る

「昭和の日」を祝う集いが明治神宮で催され、国を想う人たちが千人余り集った。頼まれて筆者が「昭和」を語った。

年齢八十五に達した筆者の頭の中を『方丈記』

(鴨長明作) の名文が去来した。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世中にある人と栖と、又かくのごとし。(中略) 予ものの心を知れりしより、四十余りの春秋を送れる間に、世の不思議を見る事、やゝ度々になりぬ」

彼の倍ほどの人生を経た筆者には不思議なことが数々あった。

昭和の歴史とともに生きた筆者の誕生は、日露戦争からたった二十二年後のことであつ

た。

新たな国立の戦歿者追悼施設は、心ある多くの国民の声と力を結集して、断固阻止しましょう。

特に昭和の初年は大不況で総じて貧しかったが、当時の人たちは凜として生きていた。子供たちに日露戦争の意義など分かうはずがないが、奉天戦の三月十日は「陸軍記念日」、日本海海戦勝利の五月二十七日は「海軍記念日」だった。いずれの日も前線で戦った軍服を着た兵隊さんが学校にやってくるまで意気揚々と武勲を語った。

家では「縄なう父は過ぎいくさの手柄を語る 居並ぶ子供はねむさ忘れて耳を傾けこぶしを握る」(『冬の夜』)を歌っていた。

長じて歴史を学び日露戦争の重要さが分かってきた。ほぼ五百年続いた白色人種の国々による植民地化の東漸(勢力が東の方へ次第に伝わり広まること)の流れは、アジア諸国に達していた。華夷思想の支那(当時清)ですらアヘン戦争で英国に敗れ、支配を逃れていたのはシヤム(タイ国)と日本だけであつた。

いわば日露戦争はその最終戦であったのだ。そして世界の予想を裏切つて日本が勝つた意義は大きい。世界はコペルニクスの転換と誉め称えた。こうした昭和の生き様を、冷血の学者は軍国主義の鼓吹などと軽々しく論ずるが、地球上の植民地化東漸の恐ろしい事実を知つた我が民族が、自らの国は自ら守らねばならないと気づいた命懸けの所作だったのだ。

一燈から万燈へ

こうして世界の五大国に上り詰めた我が国は、五族共存の満洲国を万里の長城の外側の化外の地に建国した。先進国への説明不足や米国鉄道王ハリマンの満鉄投資拒否など、若干無念さを感じはするものの、カリフォルニアやハワイを星条旗の星に加えたアメリカとさして変わりはない。

その頃アメリカは、一七七六年の建国という浅い歴史ながら逐次世界をリードする立場になりつつあった。その一方で人種差別が激しく、黒人問題に悩んでもいた。彼らにとつて黄色日本が太平洋を隔てた胡散臭い存在にもなつてきつつあった。

大東亜戦争の起きた年、ルーズベルトが大

統領であつたことは日米双方にとって不幸であつた。彼は極端な日本嫌いであつた。平和模索も求められた御聖慮に応え、十月発足の東條内閣は野村・来栖二頭立ての大使態勢で話し合いを迫つていた。これに対するルーズベルトの対応は、「ハル・ノート」であつた。つまり一方的な対日要求を突きつけ、日本を封じ込めようというものでしたのである。

いまの日本人は九割近くがこの時の東條の役割を正確に掴んでいない。

この戦いは日本の真珠湾奇襲攻撃で始まつたが、昨年末のフーバー大統領の回顧録『Freedom Betrayed』：邦題『裏切られた自由』は、東京裁判史観の清算のきっかけになるほどの重要資料といえよう。

つまりルーズベルトの採つた政策に対しては、誰が総理であろうが、あの戦争は避けられなかつたのではないか。吾戦い、そして敗れた。

勝者の手で歴史は綴られるという教えどおり、彼らの手になる「太平洋戦争史」をあらゆる機会を捉えて日本国民に叩き込んだ。陸戦法規の違反までして軍事法廷を開き、七人の首を切つた。捕らえたのは昭和天皇の誕生日、裁いたのは彼らのうち六人がかつて学ん

だ陸士の講堂。首を絞めたのは今上陛下の誕生日という残酷さであつた。日本のすべての否定であり、再びアメリカに抵抗することのない日本づくりであつた。約五世紀間におよんだ植民地化から唯一堂々と生き抜いた我が民族の美質をすべて消すことが占領の課題であつた。個の尊厳を強く主張し、公を忘れ、権利の主張専らにして義務を疎かにするなど、我が民族が営々として築いてきた美質は音を立てて崩れていった。

経済大国にもなり豊かさを身につけたがゆえに、我われはこの崩れを容易に自覚することができなかつた。

佐藤一斎は説いた。

「一燈を提げて暗夜を行く。暗夜を憂うること勿れ。只だ一燈を頼め」

暗夜のような戦後の日本が半世紀以上も続いてきた。嘆いているだけではまったく解決にならない。志ある人たちは、一燈を提げて進もう。やがて万燈となつてこの国を照らしてくれる日が必ずやってくるはずである。

どいつに生きていた

日本はいまなお地震・津波・原発事故の三重苦ともいべき悲劇の連鎖の中にある。

仏事では四十九日の日を満中陰と呼び、善供養を営み、忌明けとも称するの、四十九日に当たる四月二十八日は、いまだ行方不明者が一万一千人を超える惨状である。

奇しくも五十九年前の昭和二十七年四月二十八日は、我が国から占領軍が引き揚げ、主権を回復した旅立ちの日であった。

君民一体

天皇皇后両陛下は、この国難にいたくご宸襟を悩まされ、国民と国難を分かち合いたいと、皇居での暖房や電灯などのご使用をお控えになる「自主停電」を実行された。

自らを厳しく律する範たらんと、寒さはセーターなどを召されておしのぎになられたともれ聞く。

国民の禍は我が禍。民の悩みは我が悩みとお考えの天皇は、現場の事情が許す限り、被災地のお見舞いをされる。被災者の目線に合わせ、跪かれて真摯に見舞われる。感極まって被災者は手を合わせ涙ぐむ。

「両陛下のご訪問は、被災者にとって何よりの薬。いかなる行政の努力も、両陛下の一言にはかなわない」

火山噴火時に全村民離島した三宅島の平野村長の言や重しである。

両陛下ご訪問の際、避難所にいた男性が、「励ましよりもお金がほしい」と大声で話していたが、陛下にお声をかけられると堰を切ったように大声で泣き出したという。

この君民の関係は、君民が永年紡いできた所産であり、他国の心ある人たちの羨望の的となつている。

「義」に生きる自衛隊、警察、消防

時の政府中枢から「暴力装置」とまで言われた自衛隊十万余の大活躍はすべての国民の胸を打った。

石巻市などでは腰まで泥水に浸かって黙々と避難者を救い出し、死体処理し、食事は乾パンと缶詰、風呂もなかなか入れず、寒風に野宿という過酷な状況下で活動をする勇士たちに、全国民から感動と感謝の渦が巻き起こった。

また、約二万人の米軍人が参加した「トモダチ作戦」も見事であり、水浸しになっていた仙台空港などに強襲揚陸艦エセックスを派遣してたちまち復旧し、その威力を発揮したことは心強い限りであった。

南三陸町では、防災担当の遠藤未希さんが町民に津波の襲来を告げ続けながら、我が身は波にさらわれ散ってしまった。昨夏結婚し、秋には披露宴を行うため花嫁衣裳なども整えていたという。

壊滅的な被害を受けた岩手県大槌町でも、住民の避難誘導中に半鐘を打ち続け、あるいは水門を閉めに向かった消防隊員ら十一人も犠牲になった。危険は感じつつも「公」のため「義」のため、多くの方々が役割に敢然と殉じた。

惻隠の情

その日、児童の七割が犠牲になった石巻市の大川小学校では、合同慰霊祭が行われた。八十四人の先生や児童の遺影が皆笑顔だったのが切なさを増した。この世の出来事かと疑う。

同じ石巻市の渡波小学校では一か月遅れの卒業式が行われた。

人気者の K 君がいない。迎えに来た家族と帰宅して波にさらわれた。

K 君の親友は悩んだ末、黄色のポロシャツで式に出た。亡くなった K 君や制服のない児童のことを思い、制服での出席を断念したという。

悲劇の大きさは、こんな子供にも惻隱の情（相手を思いやる心）をもたらしただの。

死の床で同胞を思っ心

キャンデーーズの田中好子さんががんばると闘い、命絶えんとする時、肉声で、

「被災された皆様のことを思うと心が破裂するように痛み、ただただ亡くなられた方々の

ご冥福をお祈りするばかりです」

「必ず天国で被災された方のお役に立ちたいと思います」

と息も絶え絶えに語ってこの世を去った。

民族の誇り「絆」の強さ

このような我が民族の自制心を忘れず、し

かも事にあたり我が身を顧みない勇氣、そして強いコミュニティ精神などに対して、外電は世界各国の賛辞を次々と報じた。

豊かになるとともに我が民族にはびこっていた絆の乱れ、個の主張の虜になって無縁社会が到来し始めていた。この大きな災難がその生き様の綻びを気づかせてくれた。所詮、人間は一人では生きられないという「生きる理」を教えてくれたのだ。

まさに先人の説く通り、「逆境は神の恩寵的試練」であった。

花嫁人形と平和

父母や祖先に報恩感謝を捧げる日

お盆の正しい呼び方は「盂蘭盆会」という。その行事はお釈迦様の弟子・目連尊者が母を救った話に由来している。

目連尊者は修行を重ね神通力を得て、亡き母が餓鬼道に落ち、逆さ吊りにされて苦しんでいるのを知った。母を救う道をお釈迦様に尋ねたら、

「夏の修行が終わる七月十五日に僧侶を招き、多くの供物を捧げて供養すれば、母を救える」

と教えられた。目連尊者がお釈迦様の教えの通りにしたところ、その功德によって母親は極楽往生を遂げられたという。

それ以来、父母や先祖に報恩感謝を捧げ、供養を積む重要な日となり、我が国では「盆と正月」といわれるほど生活に溶け込み尊い行事となった。

塞がれたままの道

毎年のお盆、七月十三日から靖國神社の「みたままつり」が行われる。地域は教え切れないほど多くの黄色の供養提灯で埋め尽くされる。善男善女が集まり、様々な奉納の催しが行われ、表面的には何の問題もないが如く靖國のお盆は終わる。

しかし、戦後の靖國の苦悩は限りなく続く。絶対的支持者たちであった生き残りの戦友たちの老齢化。社会の木鐸たる自覚を放棄したマスコミの無責任発信の繰り返し。

サンフランシスコ講和条約の十一條にもとづき、日本を裁いた十一か国の了解を得て全戦犯の名譽回復を国会で満票で議決し、この国には法的に A 級戦犯は存在しないのに、立法律に身を置きながら軽々しく「A 級戦犯」と口にするのは単なる法的無知なのか。それとも選良としての自覚の不足か。

国家のために身を捧げる行為を最高の榮譽と讃え、それを顕彰慰霊することは近代国家の良識である。それなのに国家を代表する総理が靖國神社にひるんでいるのはなぜなのか。せつかく小泉総理が切り拓いた道は、その後の歴代の総理がたじろいで塞がれたままだ。二百四十六万余の英霊たちの無念に思いを致すとたまらない。

悲劇を繰り返さない国づくりのため

靖國神社の境内にある遊就館に「花嫁人形」がたくさん奉納されている。筆者は心が乱れると会いに行く。

その一つ、北海道出身の佐藤武一命の母親、ナミさんが亡き息子にせめて花嫁人形を抱か

せたいとの思いで綴った手紙を紹介しよう。

「武一よ、貴男は本当に偉かった。二十三才の若さで家を出て行く時、今度逢ふ時は靖國神社へ来て下さいと雄々しく笑って征った貴男だった。どんなにきびしい苦しい戦いであつただらうか。沖繩の激戦で逝つてしまつた貴男……年老いたこの母には今も二十三才のままの貴男の面影しかありません。日本男子と産れ、妻も娶らず逝つてしまつた貴男を想ふと涙新たに胸がつまります。今日ここに日本一美しい花嫁の桜子さんを貴男に捧げます」
(後略)

この花嫁人形の傍らにナミさんが馬と熊の親子の木彫りの像を添えている。馬や熊でさえ親子睦まじく生きているのにと言いたいところだが、何も語っていないのが却って切なさと呼ぶ。戦争が母子を切り離れた切なさかひしひしと伝わってくる。平和の尊さが身にしみる。

このような悲劇が起きない国づくりを急がねばならない。

日本の現状を救うもの

六年八カ月に及ぶ占領政策は巧妙を極め、日本の良い歴史を否定し、二千年余磨いてきた民族の美質、とりわけ紡いできた絆をズタズタ切りにした。

戦争の残酷さを体験し、疲弊のどん底にあつた国民は、占領下で批判の自由が全くなかつたこともあつたが、占領政策が間接統治方式であり、逆に干天の慈雨の如く受け取つた人も多かつた。

その頃、占領軍の手に成つた憲法を、六十年たつたいま、一行たりとも改正しえないような生き様で、このすさまじい国際間を、我が民族は生き抜けない。

ツギハギだらけの心臓になつたが、我が民族の栄光、そして美質を、そしてあらまほしき民族の生き方を説き続けたいと思う。

筆者はどん底のアサヒビールを指揮した時、ヴラマンクの絵に魅せられたものだ。彼の絵は大抵、泥んこ道や嵐の風景の如き暗い絵が多い。たが必ず絵の右上方から強い光が差している。どん底では、ささやかな光でも求めてやまない。暗闇では一条の光が生きる力を与えてくれる。

かの吉田松陰も「志定まれば、氣ますます盛んなり」と説く。

軍の学校でも「志立たざれば舵なき舟、轡なき馬の如し」(王守仁)と教えてくれた。曹洞宗の創始者・道元禪師も「切に思うことは必ず遂ぐるなり、切に思う心深ければ必ず方便(やり方・手段)も出てくるべし」と教えてくれている。

筆者は、この日本の現状を救うものは、教育・躰をおいて他にはないと固く信ずる。

坂村真民先生が常に説かれた「念ずれば花ひらく」「志のあるところ道がつく」に思いを致す。

さあ心の眼を覚ませう！

殷鑑遠からず

——名刹・円覚寺を訪ねて

かつて中国に夏という王朝があった。その夏の桀王が悪政を続けて滅びたのに、次の殷の紂王がそれを歴史の鑑とせず、暴虐の政治を続けて滅びてしまった。殷鑑遠からずの故事である。四書五経の一つ『詩経』の一節。

知る人ぞ知るその来歴

夏の一日、鎌倉の名刹・円覚寺の横田南嶺管長を夫婦でお訪ねした。戦後、かつて管長であった朝比奈宗源老師を慕い、厳しい座禅の修行をした親友からの依頼であったので喜んでお訪ねした。

その日、鎌倉は夏の陽が輝き、青葉がまばゆかった。なんと法衣に端然と身を固めた管長様、おん自ら門まで直々のお迎えに恐れ入った。

今上陛下が皇太子時代に御成りの時も、あの大東亜戦に散った南雲忠一中将の出陣の前夜も、朝比奈管長とじっくり語られたというお部屋に通された。我が夫婦の老齢を慮ってか、籐椅子が用意されていた程の勿体なさであった。

筆者は致知出版社の拙著『日本人の気概』を署名入りで贈った。横田老師からは法話集『いろはにほへと』をご署名入りでいただいた。

その中になんと森信三先生の立腰の学びが語られており、同志のように思われ、嬉しくなった。

鎌倉時代の文永十一(一二七四)年と弘安四(一二八二)年、当時元と称していた中国が二度にわたって我が国に襲いかかってきた

戦を「元寇」という。そもそもこの円覚寺は弘安の役の一年後、北条時宗が二つの戦の敵味方双方の犠牲者に対し、南宋より渡来した名僧・無学祖元を鎌倉に招き、鎮魂のために建立したという由緒ある名刹なのである。

円覚寺サミットを開催せよ

歴史を救わっていない昨今の若者の中には、元寇という国家の最大危機すらも知らない者が多い。

四百余州を挙る 十万余騎の敵

国難ここに見る 弘安四年夏の頃

なんぞ怖れん我に 鎌倉男子あり

正義武断の名 一喝して世に示す

いまの中国より版図の広い元が、突如我が国に襲来した。壱岐・対馬の国守の自決をはじめ多くの同胞が犠牲になった。我が国の先人たちはこの「元寇」の歌詞の如く、熱戦敢闘し、二度とも台風(神風と呼んでいた)によって元は敗退した。

いまの韓国も北朝鮮も元に征服され、元寇では先陣として我が国を攻めてきた。歴史の

真実である。

歴史認識を常に外交カードに用いる中韓両国に、この歴史の真実をどう認識しているのかと問うべきなのに、知ってか知らずかまったく抗弁しない我が国の政治家たちの「不作為の罪」は極めて大きく、かつ重い。

それどころか、我が国でいま使われている歴史教科書の中に、この元寇を「元の遠征」と表現し、自国の大戦を「侵攻・侵略」と表現していることを読者はご承知だろうか。

先の大戦から既に六十七年経った。筆者は歴史の真実から遠ざかっていった時間の長さに心が重くなっていた。

横田老師が、国宝の舍利殿の後ろにある無学祖元の像が祀られている開山堂に案内してくださいました。黒光りしている像の直前に立つた筆者は身震いした。まさに「殷鑑遠からず」。いまこそ全アジアの国々（主に黄色人種）のリーダーを円覚寺に招き、「円覚寺サミット」を開くべきだと強く感じた一瞬であった。

さまざま我が国と常に無理難題を付き付ける近隣諸国にとって、円覚寺の存在は限りなく重く、かつ宝である。

産経新聞「正論」(平成 24 年 6 月 4 日) 転載

「領土主権」意識の高まり生かせ

日本大学教授 百地 章

1982年のフォークランド戦争の際、開戦に反対する閣僚たちに向かって、サッチャー首相はこう言ったという。「この内閣に男は一人しかいないのですか」。戦争はイギリス軍の勝利に終わり、首相の人気は急上昇した。

「1人の男もいなかった」

南大西洋に浮かぶフォークランド諸島は人口約2千、荒天の日が多く風も強くて樹木の育たない不毛な島である。英領に属するが、島の領有権をめぐりイギリスとアルゼンチンの間で長年争いがあり、互いに正当性を主張して譲らなかつた(安藤仁介「フォークランド諸島の領有権紛争と国際法」)。そうした中、アルゼンチン軍の突然の攻撃に対してイギリスが遠く機動艦隊を派遣し防衛したのがこの

戦争であった。

これに対し、尖閣諸島は長らく領有権争いなど存在しなかつた日本固有の領土である。周辺には豊かな漁場があり、イラクに匹敵するともいわれる石油資源が眠る。明治政府は調査を重ね、無主の地であることを確認のうえ、明治28(1895)年、日本の領有を宣言した。当時、中国(清国)を含む諸外国は異議を唱えなかつた。以後、日本人が居住し、多い時には200人以上が鯉節工場を営んだりして「実効支配」してきた。中国が突然、領有を主張しだしたのは1971年、国連が石油の埋蔵を発表した直後である。

その尖閣諸島に対して中国が領土的野望を露わにしたのが、一昨年9月7日の中国漁船体当たり事件であった。ところが、民主党政権は断固たる処置をとるところか、中国人船

長を早々と釈放してしまった。菅直人政権には、「1人の男もいなかった」ようだ。

安逸を貪り国家意識が欠如

自国の領土に対するこの意識の希薄さは何
が原因なのか。

民主党政権の体質もあるが、7年近くに及んだ連合国軍総司令部（GHQ）による日本弱体化政策の結果でもあろう。自国の「安全」に加え「生存」まで他国に委ねた現行憲法の影響も大きい。さらに講和独立後も、米保護下にあつて安逸を貪り、憲法改正や自主防衛の努力を怠ってきた日本人自身の国家意識の欠如にもよる。

そのため、民主党政権の愚かな首相は「日本列島は日本人だけのものではない」と言い出す始末であつた。与し易しとみた韓国は不法占拠を続ける竹島の支配を強化し、ロシアも北方領土に大統領が足を踏み入れ、中国も明らかに尖閣諸島を取りに来ている。

そもそも、国家主権とは国家の独立性、換言すれば他国から干渉されない権利を意味し、各国とも自国の領土や国民に対し包括的かつ排他的な支配権を有する。前者が領土主権

（領域主権）、後者が対人主権である。ところが、占領下で国家主権が制限されていたこともあり、わが国では国民の主権感覚が麻痺してしまつた。

もちろん、グローバル化の進行により、今日、伝統的な主権国家がある程度変容したの
は事実であろう。しかし、領土主権は、「時代遅れ」でも何でもなく、領土に基礎を置く
国家（主権国家）は、今も重要な存在と見
なければならぬ（木村汎「グローバル化によつて『領土主権』は時代遅れとなつたのか」。そのような自覚の欠如が、竹島問題や尖閣事件を惹起したといえよう。

泰平の眠り覚ました中国漁船

とはいえ、尖閣事件は70年近く続いた日本人の泰平の眠りを覚まし、何百人、時に何千人ものデモが全国各地で展開されるようになったし、東京都の石原慎太郎知事による尖閣諸島の購入発言以来、既に7万件、10億円を超える寄付が寄せられているという。「領土領海を守る法整備の確立」を要望する全国署名も212万人を数え、国民の間にはかつてない領土意識の高まりが見られる。

世論を背景に、外国漁船の違法操業の取り締まりや領海警備体制の強化のため、ようやく海上保安庁法の改正案が閣議決定された。法案では、海上保安庁の任務として新たに

「領海警備」業務が明記され、領海侵犯した外国漁船に対して「立ち入り検査」なしに「退去命令」が出せるようになり、無人島に上陸した不審者の逮捕権が海上保安官にも認められている。まさに画期的といえよう。

だが、尖閣諸島をはじめとするわが国の領土を断固、防衛するには、自衛隊法の改正が不可欠である。同法には、「領空侵犯」規定はあるが、「領海侵犯」や「領土侵犯」への対処規定はない。それゆえ、自衛隊法に「警戒監視」や「領域警備」規定を設け、平素から、「警戒監視」に当たらせるとともに、「治安出動」や「防衛出動」以前の段階から「領域警備」ができるようにしなければならないのである。それにより漁民を装った兵士や武装ゲリラの強行上陸を防ぐことも可能となる。

そして、領域警備規定の整備は将来、憲法9条2項の改正、つまり軍隊の設置にまで必ず連動していくものと確信している。

（英霊にこたえる会中央本部運営副委員長）